

【書評】

伊東光晴『ガルブレイス——アメリカ資本主義との格闘』

岩波書店, 2016年, xiii + 216 + 8 pp.

根井雅弘『ガルブレイス——異端派経済学者の肖像』

白水社, 2016年, 200 pp.

ガルブレイスの没後10年の節目に、伊東光晴の『ガルブレイス』と根井雅弘の増補復刊『ガルブレイス』（初版1995年）を読み重ねられるようになったことは喜ばしい。伊東にとって、今回のアメリカを通じた現代資本主義論の刊行は、『ケインズ』（1962年）によるイギリス描写、『シュンペーター』（1993年、根井と共著）によるドイツ描写と合わせて、念願の三部作の完成を意味するとのことだが（viii）、日本のガルブレイス研究にとっても、中村達也の『ガルブレイスを読む』（1988年、文庫版2012年）にこれら2冊が加わったことは、三部作の完成を印象づけるものとなった。

伊東の『ガルブレイス』は、第I部でアメリカにおける社会哲学（「自由」の考え方、プラグマティズムなど）や経済学史（「輸入経済学」対「制度学派」）の特徴を歴史的背景とともに示し、第II部でガルブレイスが経済学者となるまでの前半生を紹介した後、第III部で彼の経済学を検討している。経済学者ガルブレイスは、『アメリカの資本主義』（1952年）で「拮抗力の理論」を示し、『ゆたかな社会』（1958年）で「依存効果」や「静かなインフレ」や「社会的アンバランス」を論じ、『新しい産業国家』（1967年）で「テクノストラクチャ」の台頭を説き、『経済学と公共目的』（1973年）で「公共国家」の理想を示したが、その全体的な特質は「通念への挑戦」にあるという。伊東は中村や根井のガルブレイス論に多くを譲っていることを

認めている（ix）。しかし、現代アメリカを見据えながら、補章で『大恐慌』（1955年）をとりあげ、終章で「新しい金融国家」の到来に論及していることは独自であり、根井が「一番注目すべき」（193）と指摘するとおりである。

先に中村や根井のガルブレイス論を読んでいた評者が、伊東のガルブレイス論のなかに見出し、個人的に強い関心をもったのは、「北欧」や「福祉」への言及であった。これについては、伊東が2012年に急病に倒れた経験が少なからず反映されたと推察される（175）。

ガルブレイスには北欧コネクションがある。彼が大きな影響を受けたヴェブレンはノルウェー移民の子であったし、1937年にガルブレイスはイギリス訪問の後、スウェーデンに行きオーレンやミュルダールと会っている（63）。以後、ガルブレイスはミュルダールと友人関係を築き、アメリカ経済学会会長時には彼をJ.ロビンソンとともに講演に招いた。「1930年代の経験は、良き政治によって社会は変わるという確信をかれに与えた」（iv）という出来事はおよそ共通しており、両者は「リベラルで革新的な思想を持ち続けた」（iv）同志であった。

伊東は、ヨーロッパの自由は福祉社会や社会民主主義を生んだが、アメリカの自由は福祉への志向を拒否したと論じ（12）、ガルブレイスが社会改革の必要を説くなかで目指していたのは福祉社会だったと考察している

が、評者から見ると、その特徴や方針も伊東が指摘する以上に北欧的である。拮抗力は自然に生まれず、政治変革が必要であり、労働組合や消費者協同組合の育成が望まれる(80)。社会的アンバランスの是正のために、所得税・法人税に加え、売上税を設置すべきである(113)。「すべての人に等しく普遍的に公共サービスを提供することによって貧困を無くし、すべての人が安心して生活できる社会を作るべき」である(114)。「静かなインフレ」の抑制には、政・労・使の協議による「コーポラティズム」が有効である(116)。国民皆保険制度が必要であり、「国が医療、福祉、教育、住宅と、広くその守備範囲を拡大し、公共のための政策を担う社会」が理想である(179)。これらのガルブレイスの改革案に見られる政策や制度は、スウェーデンで伝統的ないし先駆的に実施されていた。確かにガルブレイスは「よき西欧を知ったアメリカ知識人の闘い」(180)を展開したが、その「西欧」には北欧も含まれるはずである。ヨーロッパや福祉社会が単一でも固定的でもないことが明確化してきた今日、彼の処方箋や理想社会の性質、その実現可能性をいっそう問い直す作業が求められるだろう。

さて、根井の『ガルブレイス』は次の変更を経て復刊された。第1に、本のサイズや表紙写真などの装幀、第2に、「制度的真実への挑戦」から「異端派経済学者の肖像」への副題の変更、第3に、終章の追加(近況を踏まえた補筆や伊東『ガルブレイス』への言及など)、第4に、文献案内の若干の追加、第5に、『アメリカの資本主義』からの引用における新訳(新川健三郎訳)の使用、である。

第2の変更点にも関連するが、根井は自身の著作を「できるだけ『正統』との比較においてガルブレイスの『異端』たる所以を丁寧に説明するように心がけた」(5)としており、さらにこう述べている。「師[伊東]は、私[根

井]と違って、ガルブレイスが正統派に対する『異端』であることを敢えて強調しなかった。これは、たぶん、政策指向の経済学者である師と、経済思想史家である私との違いといってもよいだろう…」(191)。

しかし、ここでの「違い」とは、同一対象を異なる視角から照射した所産であり、二人の見解は相容れないものでなく、むしろ補完的と考えられる。というのも、根井は「異端派」を「新古典派もケインズも共に問題を含んでいるとして第三の道を開拓しようとする人々」(73)とみなし、『ゆたかな社会』において異端派ガルブレイスが誕生したと見ているが(69)、その主な論拠として、『「依存効果」が存在するようになると、生産の増加が即福祉の増大に繋がるとは言えなくなる」(78)という主張が同著に含まれたことを挙げているからである。ガルブレイスが「福祉」に政策的関心を寄せたことと「異端」であったことは結びついている。

周知のとおり、伊東も根井も広い読者をひきつけられる指折りの経済学史研究者である。伊東が紹介する経済学者は活力ある魅力的な存在になる。それは、その人物がいかに現実と対峙し格闘したかが、置かれた立場に寄り添うような筆致でもって明敏に語られるからだだろう。読者は刺激的な研究人生を追体験できるかのようであり、時代や社会と向き合う感覚が心に刻まれる。対して、根井は自身をガルブレイス「信奉者」ではないと前置きするように(6)、研究対象の心情を汲みつつも一体化することなく、関連する諸事実を的確に俯瞰し、学説の要点や意義を努めて平明に説くのであって、選りすぐりの知識が記憶に残る。「政治経済学者」として多作であったガルブレイスを論ずるに、両アプローチとも効果的なことがわかる。「文は人なり」ともいうが、それぞれに見事である。

(藤田菜々子：名古屋市立大学)